

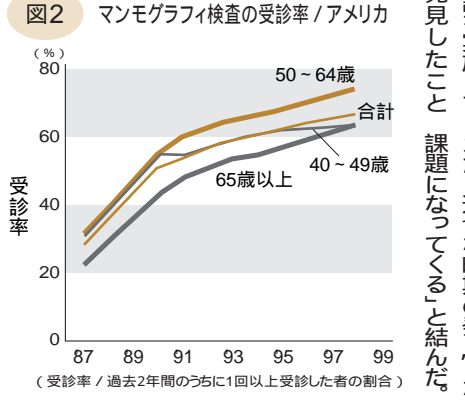
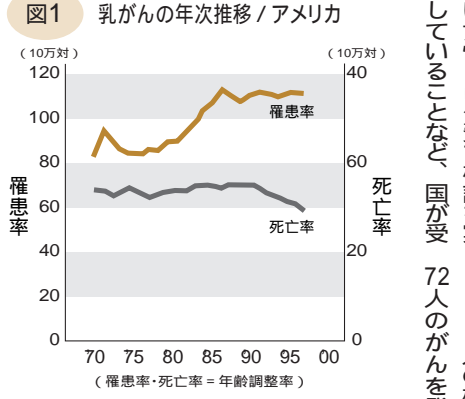
のがん検診



長年にわたって行われてきた日本のがん検診の、抜本的な見直しが進められている。今年4月には子宮がん検診と乳がん検診の新しい指針が示され、他の部位のがん検診についても検討が始まっている。また今年には、がんの罹患と死亡率の激減を目的に第三次対がん十九年総合戦略がスタートした年でもあり、2月からは、国立がんセンターのがん予防・検診研究センターが開設され、精度の高いがん検診を実施することでがん死亡率をどこまで減らせるか、といったことの実践と研究がスタートしている。こうした状況の中で、宇都宮市で開かれたがん征圧全国大会前日の9月16日、『転換期のがん検診』をテーマにしたシンポジウムが開かれ、垣添忠生国立がんセンター総長を座長に、辻一郎東北大学大学院教授、森山紀之国立がんセンターがん予防・検診研究センター長、大内憲明東北大学大学院教授、高藤博国立がんセンターがん予防・検診研究センター技術開発部長、三浦公嗣厚生労働省老人保健課長、市村みゆき栃木県保健衛生事業団部長がシンポジストとして参加した。今回は、シンポジウムの一部を要約して紹介したい。

欧米では国が 高い受診率を 制度保障し、 死亡率を減少

これを受けて、最初に辻一郎教授が「第三次対がん十九年戦略では、がんの罹患率と死亡率の激減を大きな目的としているが、死亡率激減につながるがん検診のあり方を考えたい」と前置きして、日本

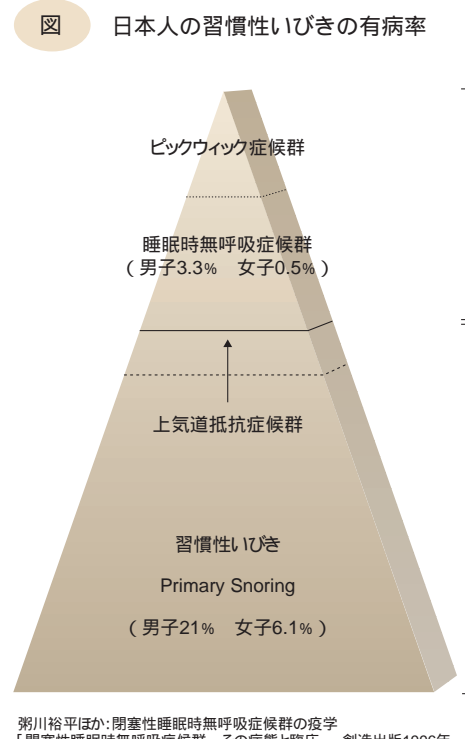


冒頭 垣人のがん死亡の動向から、肺 添座長は「がん、大腸がん、乳がんが増えていること、しかしこの3 ムのねら 部位のがんは、欧米では19 90年ごろから減ってきてい ついて、次 ることを多くの海外のデータ のように述 べた。」「日 本のがん検 診は、今ま 国では1985年頃から乳が んに大きな 転換期を迎えている。わが国 でがんが亡くなる方を減らす 最も効果的な方法は、がん検 診をきちんと進めることだと 考えているが、そのために最 も重要なことは、受診率をど うやって上げるかということ と、精度管理をどうするかと いうことである。この二点を 中心に各シンポジストのお話 を伺いたい。」

高精度の検診で 発見率は向上する。 が、費用、効率などが 課題

続いて森山紀之センター長 が、国立がんセンターががん予 防・検診研究センターでの検 診成績について、6月までに 1880人の検診を実施して ない女性には公費で検診を實 施していることなど、国が受 診率向上に制度的な保障をし ていることを紹介した。 これを受診率がさらに高い スウェーデンやイギリスなど ヨーロッパ諸国でも同様で、 それぞれの国の公共政策とし て公費による検診が行われ、 受診率を上げるためにキメ細 かな報酬制度が設けられてい ることを紹介した。そして、 わが国でも受診率を上げるた めには、サービスの提供者と 利用者双方に何らかの報酬 (インセンティブ)をもちた らす制度改革が必要だ、とし た。 また、がん検診の精度管理 については、日本での各種が ん検診の都道府県別の要精検 率と発見率を示し、がん検診 の精度に大きな地域格差があ ることを指摘した。そのうえ で、全国どの地域で検診を受 けても同等の高い精度の検診 を受けられるよう、がん検診 の均霑(てん)化に向けた取 り組みが必要とした。

平成の時代 を迎えて16年 の歳月が流 れ、昭和の年 号にもどこか懐かしさを覚 えるようになった今日この 頃。 今をさかのぼること52年 前、昭和27年(1952年) の春のこと。医療に情熱を 注ぐ熱血青年医師(後のい びき博士 故池松武之亮= 似顔絵)のもとに、23歳の 女性が母親らしき人につき 添われ訪ねました。 「どうしました?」と尋ね ても、「……」。つむむいた まま長い沈黙が続く。つい には泣き出してしまったの には泣き出してしまったの です。答えない娘に代わり、 母親がやっと重い口を開き、「実は、この娘は一昨 日結婚式を挙げましたが、 あまりにいびきが大き過ぎる という理由で、昨日の朝 離婚されました。」「そんな ばかな! たかがいびき で?」と、その足で都内の 有名大病院2カ所を訪ね たものの、「いびきは病気 ではない」と相手にされず 取りつくすべもなく帰って きたとのこと。



その話を聞いた池松医師

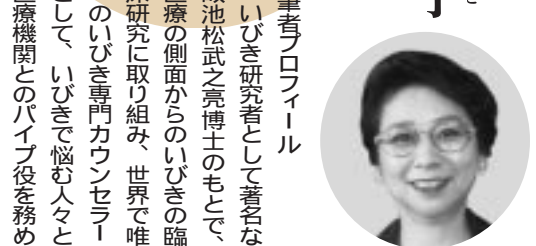
呼吸音でもない」という考え ら、当時の医学書には、 のもとに「世界いびき学会」 医療機関は「く限られたもの ()」

を日本で開催す 示さなかった医療者の中 にも、睡眠時無呼吸症に伴うい びきに対し、また睡眠時無呼 吸症の予備軍として、いびき はにわかに注目されるようにな りました。 全国で常習性いびきをか くん人は約1600万人いると 言われており、その約200 万人が睡眠時無呼吸症といわ れています(図)。いびきは 熟睡の現われと思われていた のは昔のこと。「秋の夜長と 高いいびき」などと安穩として いる時代に別れを告げ、「い びき」の本質を知って、「睡眠 時呼吸障害」を予防すること が重要となってきました。

でした。 時が流れて平成14年2月 JR西日本の新幹線運転士の 居眠り運転が発覚し、幸い大 事故にならず怪我人も出さな かったものの、身近な問題と して日本中を震撼させた事件 が起こりました。その運転士 は、日頃から大いびきをかい ていたことが判明し、検査の 結果、睡眠時無呼吸症候群と 診断されました。 この事件をきっかけに、い びきをかく人々にはもちろんの こと、いびきにあまり関心を 示さなかった医療者の中

「いびき」よもやま話

池松武之亮いびき研究所 所長 池松亮子



筆者プロフィール
いびき研究者として著名な 故池松武之亮博士のもとで、 医療の側面からのいびきの臨 床研究に取り組み、世界で唯 一のいびき専門カウンセラー として、いびきで悩む人々と 「いびきを治す」(新星出版) 医療機関とのパイプ役を務め など著書多数



いびき博士肖像 横山泰三画

粥川裕平ほか:閉塞性睡眠時無呼吸症候群の疫学 「閉塞性睡眠時無呼吸症候群 その病態と臨床」創造出版1996年